

果樹の主要病害虫の発生状況（5月下旬～6月上旬）

令和7年6月10日

福島県病害虫防除所

果樹カメムシ類のモモでの果実被害が平年より多い状況です。また、ナシ黒星病の被害果やリンゴ褐斑病の被害葉が確認されています。ほ場での各種病害虫の発生状況や今後の気象情報に留意し、各樹種の生育に合わせて防除を徹底しましょう。

1 リンゴ

（1）リンゴ褐斑病

県北・会津地方では、5月下旬の新梢葉・果そう葉での発生は平年同様に確認されませんでした（図1、図2）。一方、県中・県南地方では、新梢葉・果そう葉での発生ほ場割合は平年よりやや高く、発生時期もやや早い状況でした。本病は、初期の発生の場合、斑点落葉病の類似症状を伴う場合が多いため、注意しましょう（調査で確認された病斑はいずれも類似症状でした）。

また、果樹研究所における子のう孢子トラップ調査の結果、4月23日に初飛散が確認され、4月24日、5月12日や5月下旬にまとまった飛散が認められました（図3、6月3日現在）。例年、本病の子のう孢子の飛散ピークは6月上旬頃となるため、今後も降雨の度に飛散が想定されます。

本病は、初発が早いと多発する傾向にあるため、一次感染期からの防除の徹底が重要となります。例年発生がみられるほ場では、防除を徹底しましょう。

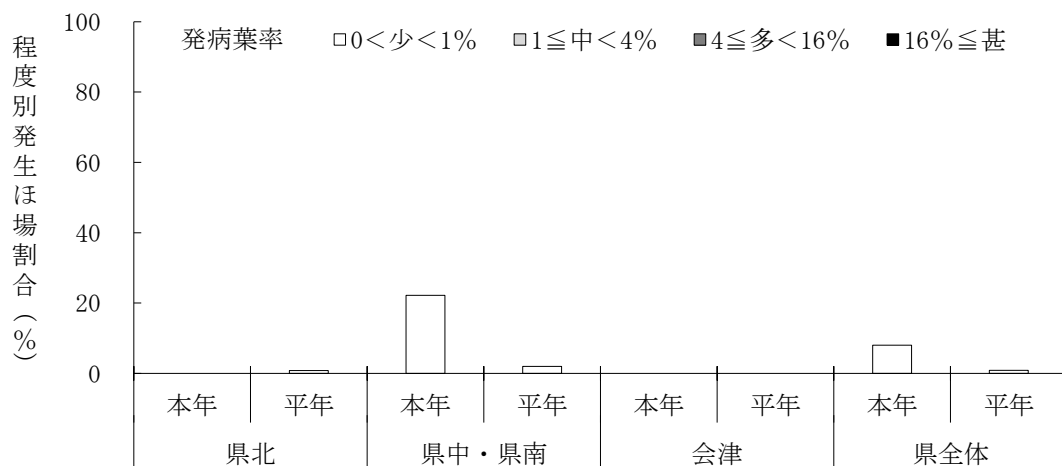


図1 リンゴ褐斑病の新梢葉での発生状況（5月下旬）

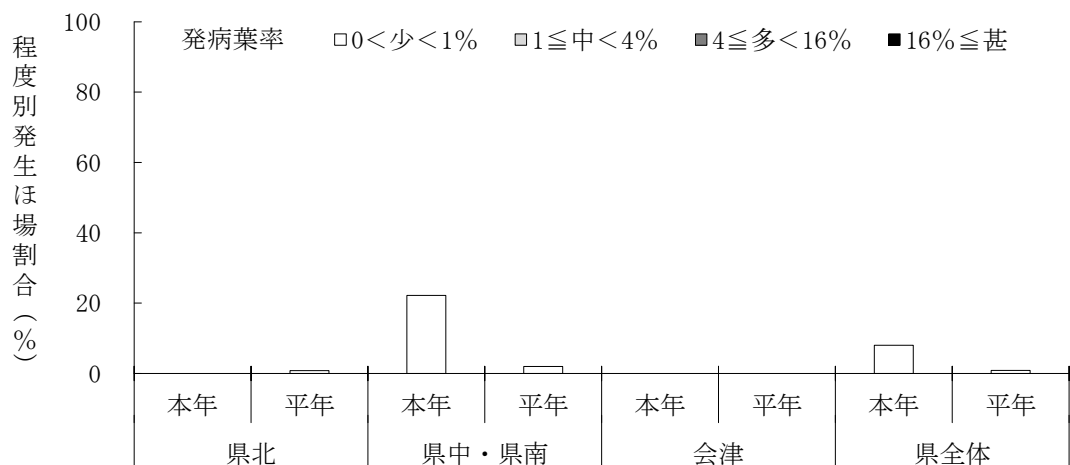


図2 リンゴ褐斑病の果そう葉での発生状況（5月下旬）

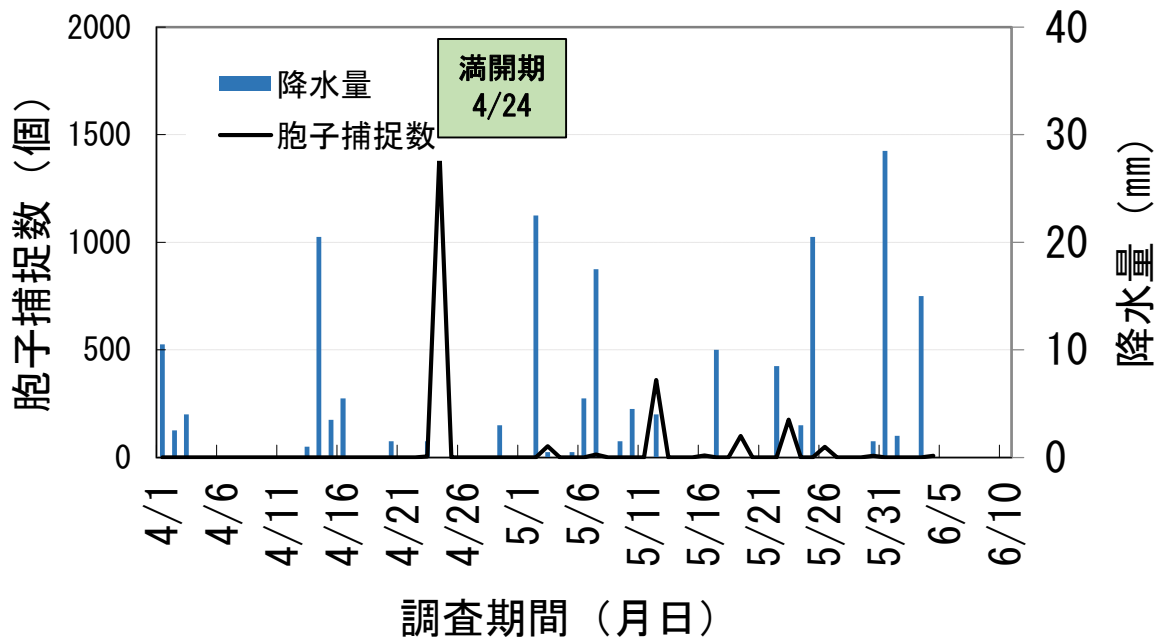


図3 リンゴ褐斑病の子のう孢子の飛散状況（6月3日現在、果樹研究所）

【リンゴ斑点落葉病との見分け方】

リンゴ褐斑病の特徴として、葉表の病斑上に分生子層（小黑点）が形成されます。このため、分生子層の有無を10倍ルーペ等で確認することで、斑点落葉病と見分けることができます（図4）。

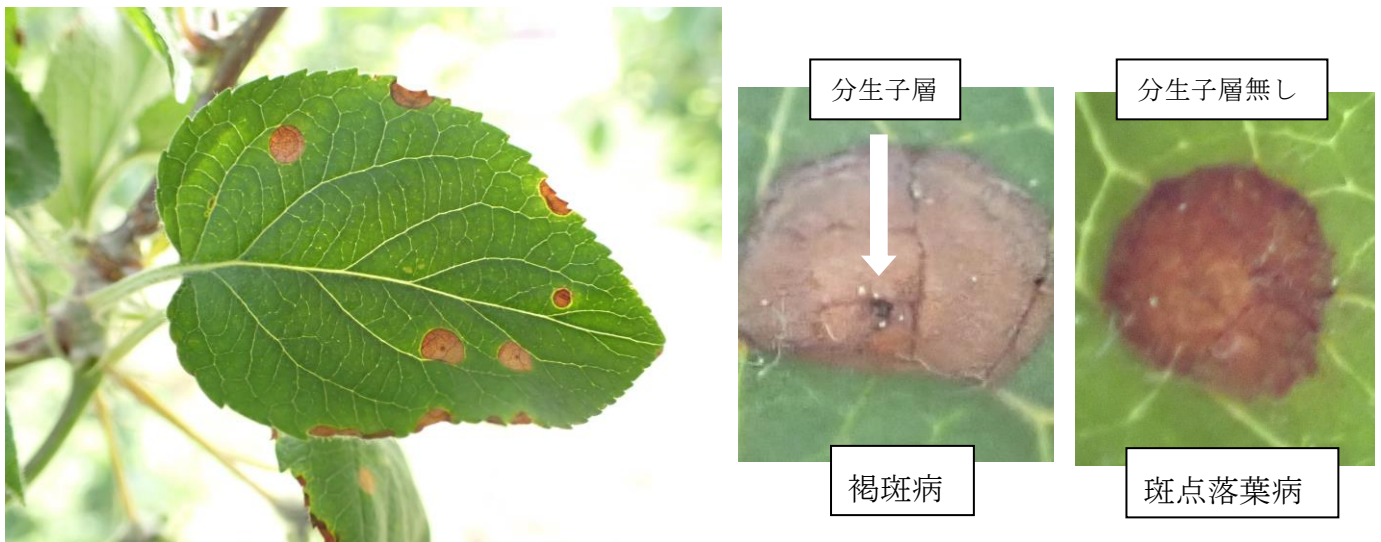


図4 リンゴ褐斑病とリンゴ斑点落葉病の見分け方

（2）リンゴ黒星病

会津研究所における子のう孢子トラップ調査の結果、5月中下旬にまとまった飛散が確認されました（図5、5月23日現在）。5月中旬の調査では、いずれの地域も本病の発生は確認されませんでした。今後も発生状況に応じて防除を徹底しましょう。

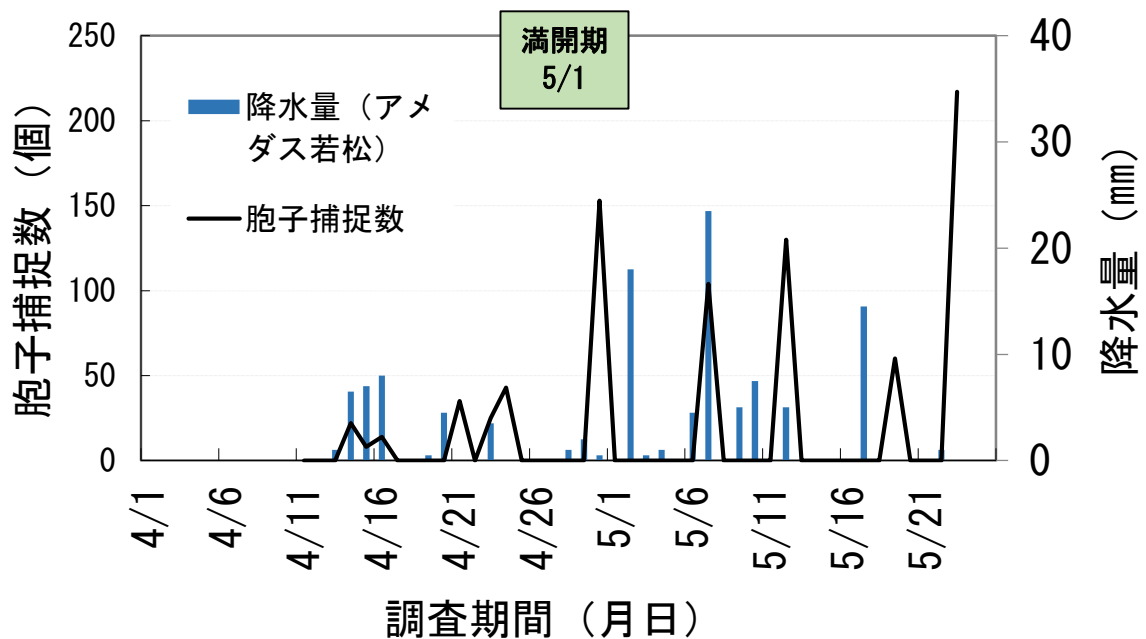


図5 リンゴ黒星病の子のう胞子の飛散状況（5月23日現在、会津地域研究所）

2 モモの病害虫の発生状況（6月上旬） 調査地点：福島地域9園地、伊達地域9園地

（1）モモせん孔細菌病

新梢葉での発生ほ場割合（6月上旬）は、いずれの地点も確認されず、平年よりやや低い状況でした（図6）。また、果実発病もいずれの地点も確認されませんでした。

今後の気象経過によっては、発生が急拡大するおそれがあるため、発病部（枝、葉、果実）のせん除を徹底するとともに、本病の発生が多い場合は、仕上げ摘果後、直ちに袋かけを実施しましょう。また、薬剤散布は降雨前の実施を心がけましょう。

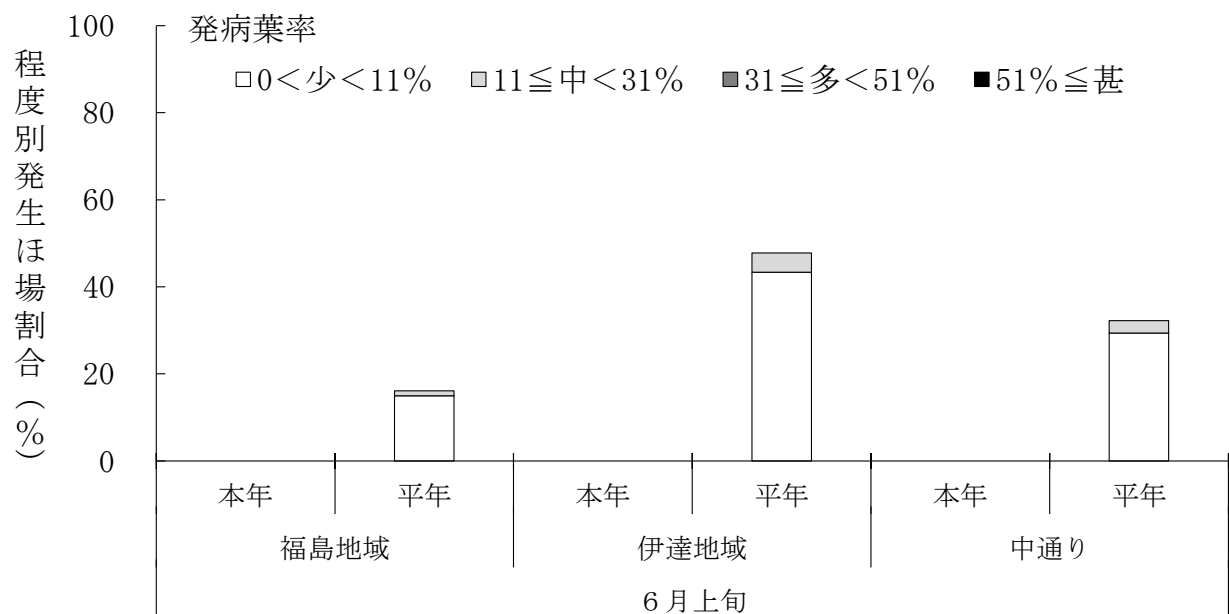


図6 モモせん孔細菌病の新梢葉での発生状況（6月上旬）

(2) シロカイガラムシ類

6月上旬の発生ほ場割合は、平年（5月下旬）より高く、一部では寄生程度の高いほ場も確認されました（図7）。

また、農業総合センター内のウメほ場におけるトラップ調査の結果、ウメシロカイガラムシ第1世代の歩行幼虫の発生は5月7日から確認され、5月中下旬がピークと判断されます（図8、6月4日現在、※昨年のピークは5月6～14日）。

本年の第2世代幼虫は、平年で7月下旬から8月中旬になりますが、この時期はモモの収穫期であるので、防除を行う際は、薬剤の選択（収穫前日数）に注意しましょう。

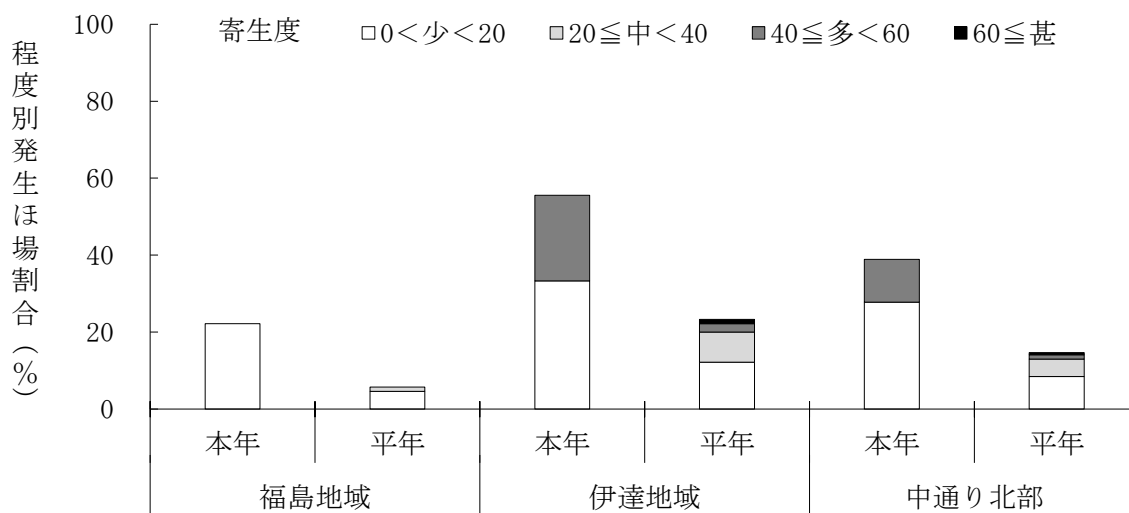


図7 シロカイガラムシ類による側枝の寄生状況（6月上旬）

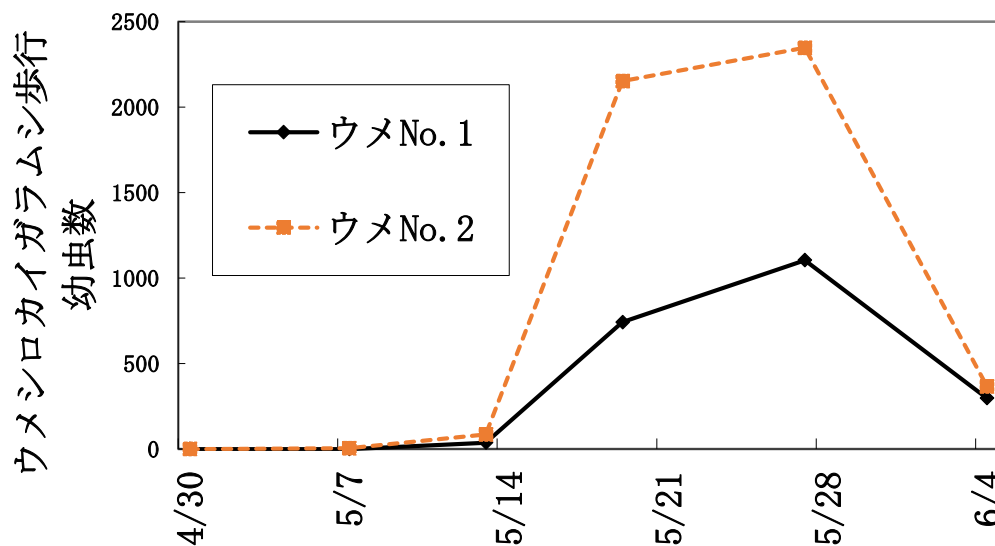


図8 ウメシロカイガラムシ歩行幼虫の発生状況（6月4日現在、農業総合センター）

(7) 果樹カメムシ類

6月上旬の果実調査では、福島市地域・伊達地域ともに5月下旬調査における平年値より発生は場割合が高い状況でした（図9）。

越冬世代成虫による加害は、幼果期から始まるため、特に山沿いの園地ではよく観察し、飛来を確認したら速やかに薬剤防除を実施しましょう（令和7年5月23日付け病害虫防除情報（果樹カメムシ類）参照）。

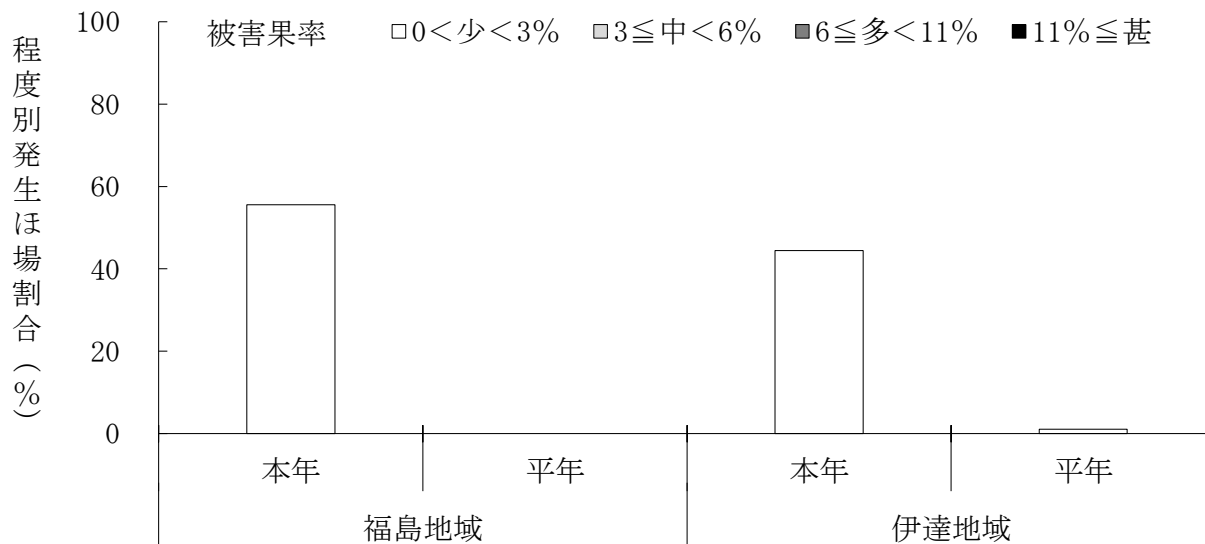


図9 カメムシ類による果実の被害状況（6月上旬調査、平年は5月下旬調査結果）

3 ナシ

(1) ナシ黒星病

中通り地方の5月下旬の果そう基部病斑の発生は場割合は、平年よりやや少ない状況でしたが、果実での発生（果面での発生が多い）が確認されたほ場が複数ありました（図10）。また、浜通り地方の5月下旬の果そう基部病斑の発生は場割合は、平年並でしたが、果実での発生（果面での発生が多い）が確認されたほ場が複数ありました。子のう胞子の飛散ピークの時期は過ぎたと考えられますが（図11）、すでに果実への一次感染が確認されていますので、果そう基部病斑の発生と併せて、ほ場での発生状況に注意しましょう。

発病した果そう基部・葉・果実は、見つけしだい除去しましょう。今後、梅雨に入り、降雨の多い時期となるため、天候に留意して降雨前の散布を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意しましょう。特に、「幸水」では、果実の感受性が高まる時期（満開後50～90日）を迎えるため、防除を徹底しましょう（果樹研究所栽培科「幸水」満開後50日：6月9日）。

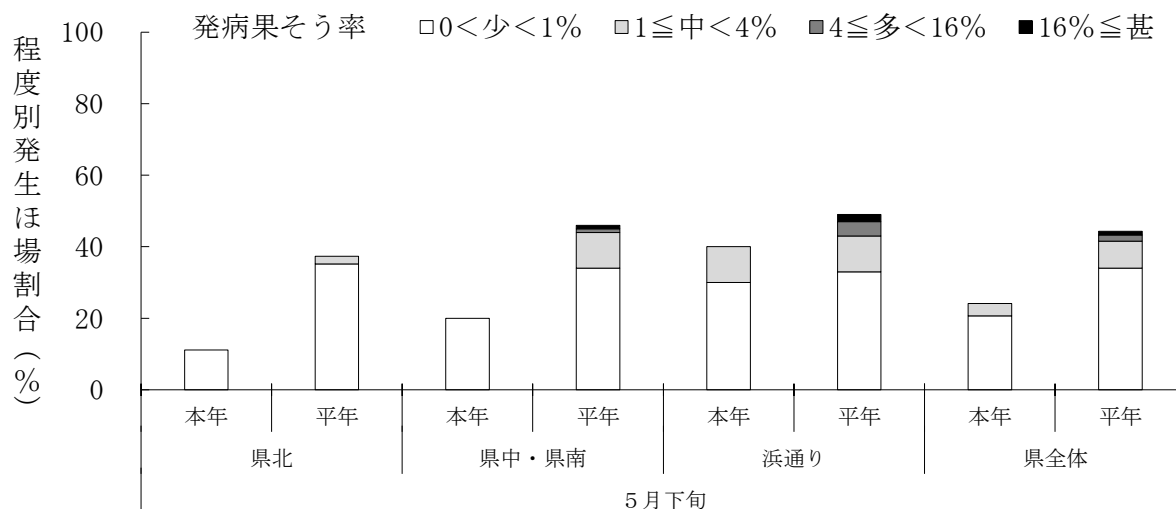


図10 ナシ黒星病の果そう基部病斑の発生状況（5月上旬、中下旬）

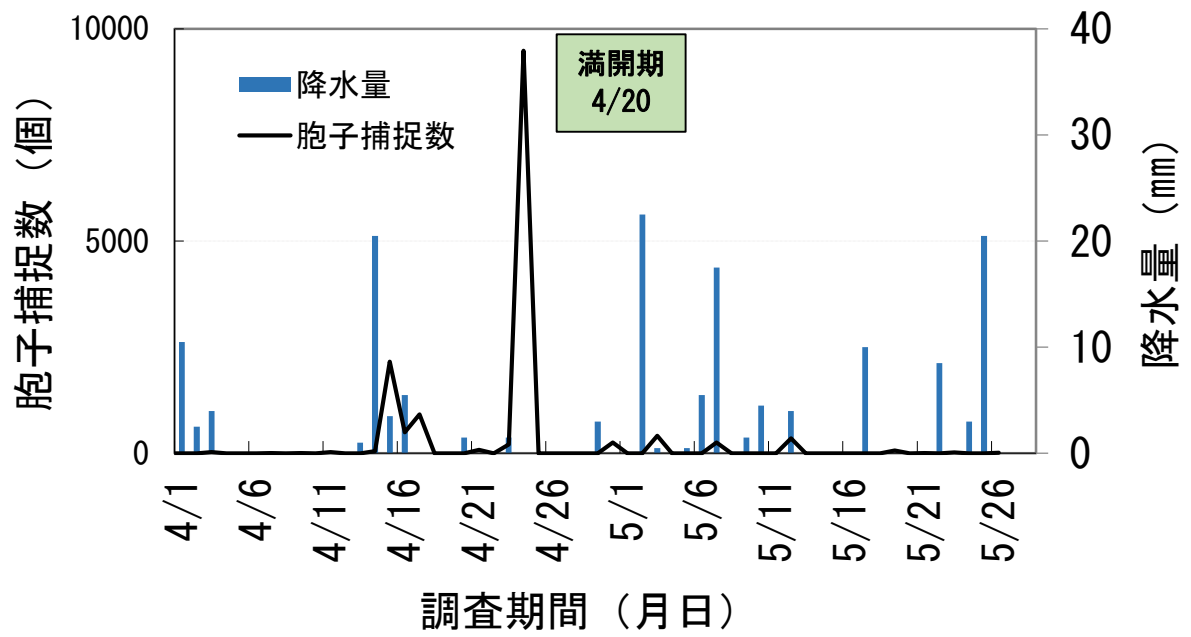


図 11 ナシ黒星病の子のう胞子の飛散状況（5月26日現在、果樹研究所）